

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第二十一回 著者 中川由香

「学問の弁」は、明治十九年三月、圭介が東京大学工学部の開設の際に講演したものです。

工部省廃省に伴い、圭介が学長を勤めた工部大学校は、東京大学工学部に統合されました。この頃圭介は元老院議員の任にあり、この直後に学習院学長を兼ねます。国作り最先端の官僚から教育者として次世代を訓導する立場への過程にある時期です。日本が目まぐるしく成長する明治中期において、これからの学問について次代を担う若者への圭介の訓示は示唆に富み、その内容は東京学士会院雑誌に収録されました。

まず圭介は学問を定義します。面倒な字を多く覚え、難しい本を数百も読む人を先生として尊敬するが、それでは学問として不十分だ、学問は、知恵を磨き衣食住で人を助け自分をも利し、天地の事物について昔を考え、今を知り、未来のことを推察するものと述べます。

圭介の生きた江戸末期から明治中期に至るまで、学問は大きく様相を変えました。圭介の幼少時、いろは、一二三に始まり、四書五経が高等教育でした。明治に移り、主要科目は歴史、地理、語学、経済、物理、化学、数学などに変わりました。圭介は「日本には漢学をはじめ書典や制度が伝わったが、大抵は空虚で現在の人間社会に実益はほとんどない。本邦の薬物医学農業商法も現在の土台ではあるが、習得に年月がかかりすぎる」とします。圭介は五年かけ

て儒学漢学を学び、それを確かな自身の素養としていますが「自分のごとき浅学でも十年以上の光陰を費やして必要事項の十分の一も知らない」と見なしました。古代を学び現世後世の事を見抜き、思想を発達させるのも必要だが、世界の構造と原理を説明し人間の実益を進める学問が重要であると、圭介は本質的な実利の視点で述べます。当時、人間に欠かせない事物でアジアが発明したものは、磁石、陶器、絹糸程度。

一方欧米は、時計、蒸気機関、蒸気船、列車、写真、電信、電話、電灯などを発明し、これら発明は皆実学によると、圭介は列挙します。そもそも学問に日本流、中国流、西洋流などの区別はないと、現実的な見方を示します。圭介は自身の土台や分野、事の東西にこだわらず、常に変遷する時代の必要性を冷静に鋭く見抜いています。

人間は古今を通観し知識を蓄え、清廉で、親戚仲良く子孫が無事であれば幸せであるのに、なぜそれが難しいのか。それは、日本人は武の気風は重んじるが、苦業力行を忍耐する性質が乏しいからとします。加えて、物理をわきま工業を理解し、商業の駆け引きに熟練し事業を發展させ、身にも国にも利したいものであるのに、物理学に暗く、農工商に迂遠であり、従来経験だけで判断し、時勢に疎いからだ指摘します。そこで、新知識を得て年々刊行される

新しい書を間断なく通読し蘊奥を極め、ただ外国を模倣するのではなく、外国人の気づかない新しい事を研究発見し、名誉を海内に示すべきと圭介は述べます。これは技術の日進月歩が続く現代も全く同様で、日本の研究開発者はこの精神を担い続けています。

「アジアの面積は欧州の六倍もあり、人口は二倍。であるのに農工商も外交も欧州人に蔑視され頭が上がらないのは、泣くにも泣かれない嘆かわしい次第である。日本はアジア中屈指の独立国だ。その国民であるからには、学問の真価を認識し、勇敢進取、百折不撓の気象を養い、実利を研究し、実業に勉励し、死学問と活学問とを分別し、遠大な功績を将来に期し、日本人の品位を高め、アジアの代表、先覚者とならんことを、少壮有為の人に望む」と圭介は結論づけます。日本だけではなく世界の中のアジア、アジアの先覚として日本人の代表者であれ、という視点です。

これが講演された明治中期は、世界の国々が次々と植民地化される中で、日本は列強に並び立とうとし、不平等条約改正に向け舵を切った時期です。論説は、国を担う若者に対し、世界においてアジアを代表する視野を与えるものでした。圭介のスケールの大きさが読み取れます。洋学者の経歴や洋行経験の豊富さから、圭介は無条件で欧米礼賛を行う人物であるように描かれる事があります。しかし圭介は日本を誇りとし、欧米を超える為に日本の発展を導き続けた和魂洋才の人物であることが、この講演録からも読み取れます。